

夏秋どり宿根かすみそうの良苗育成法

— 母株の温度管理と採穂時対葉数 —

(園試 野菜花き部)

1. 背景とねらい

宿根かすみそうは本県花きの重点品目として振興をはかっているが、これまでの試験では標高を生かし、7～10月にかけて高品質のものが生産されることが明らかとなった。しかしこの時期に県内産地で良苗を安定して確保することは困難で問題となっている。そのため7～10月にかけて安定して高品質の切花が確保できる良苗生産技術の確立が急務である。このため良苗生産で最も問題となる冬期間の採穂用母株を管理する温度及び採穂時の適正対葉数を検討した。

2. 技術の内容

- (1) 宿根かすみそうの良苗を生産する採穂時の適正対葉数は5～6対がよい。
- (2) 母株の温度管理は最低気温9～10℃に保つことにより長期間安定して、良いさし穂が生産できる。しかしこの温度の確保が困難な場合には5～6℃でも10月上旬咲頃までの作型であれば実用的に使用できるさし穂が得られる。良苗を生産する母株の温度管理を下記のとおりとする。

最低温度	採 穂 時 期	
	3月上旬～5月上旬 (8月上旬～10月上旬咲)	5月中旬～6月上旬 (10月上旬～11月上旬咲)
9～10℃	◎	◎
5～6℃	○	×

注) 1) 有望度 ◎: 良 ○: やや良 ×: 不良

2) () : 収穫期

(3) 適応地域 県下全域

3. 指導上の留意点

- (1) 対象とする品種はプリストルフェアリー、ダイヤモンドとする。
- (2) 母株の高温管理は採穂数の減少や切花品質の低下がおこるため最低気温で15℃をこえないように管理する。
- (3) 母株は最初5節程度で摘心を行い、その後発生した側枝の下葉を2対残して採穂する。採穂した穂は3～4対に調整してさし穂とする。
- (4) 良苗の生産が可能な時期の株当たり採穂数は株の大きさにもよるが、定植1年以内の株で5月上旬まで17～20本、6月上旬まで25本(累計)程度である。
- (5) 最低気温5～6℃管理の苗長や節間長は長目なため、さし芽苗の摘心はポットあげ後7～10日経過して活着した後に遅れないように行い、分枝の発生を揃えて定植する。
- (6) 採穂時に抽台の発生している穂、また発根時に抽台、出蕾している苗、摘心時に抽台の程度の甚だしい苗は使用しない。
- (7) 母株は生長活性の旺盛な茎頂培養苗が望ましいが、当面種苗商からの購入苗を利用する。株齢が古くなると発芽率の低下がみられるため2～3年で計画的に更新する。
- (8) 採穂後は液肥等を施肥し、株づくりに努める。その他の一般管理は栽培技術指針に準ずる。

4. 当該事項にかかる研究課題名

宿根かすみそうの夏秋どり栽培法 ①さし芽苗の良苗育成法

5. 参考文献、資料

昭和59年	宿根かすみそうのさし芽育苗に関する試験	岩手園試花き試験成績書
昭和55年	宿根かすみそうの開花に及ぼす育苗期間の低温の影響	野菜試験場 "

